

黒羽芭蕉の館だより ⑱

奥の細道シリーズ切手(4)

「広報おおたわら」6月1日号の本欄に続き、今回は「奥の細道シリーズ」切手シート(全20枚、昭和63年発行)のうち、第6集と第7集に記される芭蕉の4句を紹介いたします。

第6集は大石田(月山)で、1枚目には「へさみだれをあつめてはやし最上川」の句が記されています。句意は、降り続く五月雨を集めて水量を増した最上川がすさまじい速さで流れていく、となります。季語は「さみだれ」で、夏の句です。この句の初案は大石田での歌仙(36句からなる連句)の発句で、五七五のうちの中七は「集めて涼し」でした。俳席での挨拶句から最上川の急流の実景を捉えた句へと転位させているのです。

2枚目は「雲の峰いくつ崩れて月の山」です。出羽三山巡礼の句々の一つで、句意は、入道雲がいくつも湧いては崩れ、今や月山は月光に照らされている、となります。季語は「雲の峰」で夏です。

第7集は象潟(出雲崎)で、1枚目は「象潟や雨に西施がねぶの花」です。句意は、象潟の美景の中、雨に濡

れて岸边に咲く合歓の花は、眠りについた中国の美女西施の面影を彷彿とさせる、となります。季語は「ねぶの花」で夏です。

2枚目は「荒海や佐渡によこたふ天河」です。句意は、眼前の日本海には荒波が立ち騒ぎ、遙か彼方の佐渡が島にかけて天の川が大きく横たわっている、となります。季語は「天河」で秋。『おくのほそ道』きつての絶唱とされています。



奥の細道シリーズ切手 第6集 大石田

問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

周遊 38

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。



この作品はふれあいの丘にある宿泊施設であるシャトーエスポワールの玄関に設置してあります。

長い丸太を縦に割り、それをL字に組み合わせ合わせてジオラマのように仕上げられています。床は白塗りで、細長いタイルのようになっていて、手前には1対の羽があります。背景にあたる部分はギリシャにある神殿の柱のような形で、奥行きを意識して彫られています。その中心、遠近から考えて一番遠くにある場所は、金色に輝いています。

旅

おやま 小山 いく 育 日本 2003

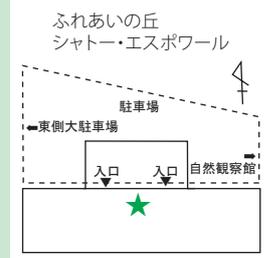
この作品は、「古代の西洋文化」に憧れた作者が、「その古代への想いを馳せる」事を「旅」として表現したものです。作者は「歴史を振り返ることは、現代を見つめることだと思うし、そこで感じたことを未来に託すことが、制作するときにとっても大事なこと」だと考えています。だからこそ、この作品を通して、「無限に広がる軸の重なりと、その上に築かれてきた数多くの文化を感じ取ってもらいたい」と考えています。



小山 育氏

作者は小山育氏。岩手県出身で、岩手大学大学院を修了。盛岡彫刻シンポジウムや安比高原彫刻シンポジウムに参加をし、現在は国画会の準会員をされています。

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718